

つながりを生む学校運営協議会と地域学校協働活動の実践 —岐阜県可茂地区における学校運営協議会と地域学校協働活動—

横山美智代¹⁾・益川浩一³⁾

¹⁾ 岐阜県可茂教育事務所（〒505-8508 岐阜県美濃加茂市古井町下古井 2610-1）

²⁾ 岐阜県可茂県事務所（〒505-8508 岐阜県美濃加茂市古井町下古井 2610-1）

³⁾ 岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1 番地 1）

1. はじめに

可茂地区には 10 市町村があり、可茂教育事務所と可茂県事務所では、それぞれの市町村の状況に合わせてコミュニティ・スクール（以下「CS」と呼ぶ）と地域学校協働活動の一体的推進に向けて取り組んできている。可茂教育事務所では CS の導入や推進に向けて教育委員会（学校）を中心とした各市町村の支援体制を考え、可茂県事務所では地域学校協働活動について社会教育関係を中心とした支援体制を考え推進している。担当者 1 人が CS と地域学校協働活動の両方の業務を担当することで、CS と地域学校協働活動のより一体的推進に向けた支援が可能になると考える。

特に可茂地区社会教育振興協議会では、毎年研修会を実施し、各市町村の取組について実践発表や交流会を行っている。様々なタイプの学校運営協議会や地域学校協働活動の在り方を学校関係者や社会教育関係者が知ることで、さらにそれぞれの市町村の実態に応じた取組を考えることができる。

ここでは、令和 4 年度可茂地区社会教育振興協議会研修会で発表のあった 3 町の実践（富加町・七宗町・八百津町）¹⁾について、発表資料を基に報告する。さらに、令和 3 年度から CS 導入に関わってきた美濃加茂市と可児市立旭小学校の実践を報告する。

今回報告する市町のうち、富加町と七宗町については、岐阜大学と岐阜県が共同設置した「ぎふ地域学校協働活動センター」の長期支援プログラムを活用した支援を、美濃加茂市と可児市については短期支援プログラムを活用した支援を行っている。

2. 富加町の実践

2.1. 富加町の紹介

富加町には、小学校が 1 校、こども園が 1 園、美濃加茂市との組合立中学校が 1 校ある。近年、転入者により町の人口は微増し、中でも学齢期の子供を含む 6 5 歳未満の人口が増えているため、少子高齢化が進む日本の中では稀な町と言える。

2.2. CS 導入に向けて

富加町の CS 導入は、まず富加小学校と地域との関わりを分析することから始まった。すると、富加小学校には以前から地域と関わる学習があり、学校を中心として多くの地域の人や団体が存在することが分かった

【図表 1】。地域住民は、長年、富加小学校を自分たちの町の学校（おらが学校）として大切に考えており、このつながりを活かして CS を導入しようと、令和元年度から準備がスタートした。導入の際には、【図表 2】のような課題が考えられたため、解決策【図表 3】を講じながらの導入になった。そして、令和 4 年度に学校運営協議会と地域学校協働本部【図表 4】が発足した。

【図表 1 富加小学校と関わりのある地域の方】



【図表 2 CS 導入時の課題】

- ①長く続く活動にしていくにはどのように組織を考えればよいか。
- ②今まで続けられてきた地域との関わり（財産）をどのように活かすか。
- ③地域づくりに熱心な人もそうでない人も、みんながつながるには、どう組織するとよいか。

【図表 3 CS 導入時の解決策】

- ・学校運営協議会で協議されたことが、時間差なく、ダイレクトに地域学校協働活動に反映されていくように、学校運営協議会委員の一部が地域学校協働本部のメンバーになる。
- ・継続されてきた地域との関わりや活動を中心に、「学び部」「安心・安全部」の2部会を整える。
- ・地域の全ての人が富加小コミュニティ・スクールサポーターとして活躍できるように、広く募集する。
- ・富加町全体で課題や願いなどを共有するために、様々な場で熟議を行い町民に知らせる。
- ・学校、PTA、地域等、関係者の理解を深めるために研修を行う。

【図表 4 CS の組織とメンバー】



< 運営協議会委員 >

学校運営協議会規則では委員の数は 15 人までとなっていたが、まずは 7 人からスタートし、その都度検討し増員していくことにした。

- ・学校運営協議会委員 7 名
- ・地域学校協働本部（推進員）5 名
- ・事務局（コーディネーター）：富加町教育委員会事務局 1 人（学校運営協議会の準備や地域との交渉を行う）

< 地域学校協働本部 >

- ・学び部
- ・安心・安全部

2.3. 学校や地域での熟議

CS 導入にあたり「富加の子がどんな子に育ててほしいのか」という一番大事な願いを共有するために、社会教育委員会、学校運営協議会、地域学校協働本部、PTA 本部役員会で熟議を行ってきた。そこで分かったことは、それぞれの立場は違っても願う子供の姿は同じということだった。

これらの熟議で出された願う子供の姿は、「思いやりのある子」、「チャレンジできる子」、「ふるさとを愛する子」など、町の人や、自然、文化を愛し、「ふるさと『とみか』が好き」という子供に育てたいという願いだった。さらに、学校経営方針も受けて、学校運営協議会のスローガンが、

「自信と誇りをもち、互いを思い、地域の一員として自ら動く子をめざす」と設定された。また、活動の合言葉を「『ありがとう』でつながる富加町」として、「地域もありがとう、学校もありがとう、ありがとうでつながる、あたたかい町づくり」を目指していこうと運営方針がまとめられた【図表 5】。

【図表 5 学校運営協議会のスローガン】



2.4. CS 導入に向けての研修会と説明会

CS を導入するために、学校職員、PTA 本部役員会、富加小コミュニティ・スクールサポーター、安心・安全部見守りボランティアなど、関係者への説明を富加町が行った。

2.4.①. 教職員研修

令和4年度の新学期早々、富加小学校で教職員研修が行われた【図表6】。教育委員会からは、地域学校協働活動が始まることによって、これまでのふるさと学習はどう変わるのか、という説明があった。

今まで教頭や学年主任が行っていた地域との調整は、教育委員会の事務局（コーディネーター）が中心となって行うため、物理的にも精神的にも教員の負担は減る。そのことにより、本来の職務に専念できるようになり、子供たちと向き合う時間が増えることが期待される。それと同時に、地域の多くの人とつながることで、子供たちはその活動で地域の中で一番詳しい人から学ぶことができるため、学びが深まり質が高まることも期待される。

教員には、「富加の宝を育てているという当事者意識をもって、地域の方とともに取り組んでいきましょう」と確認し合う場になった。

【図表6 教職員研修】



2.4.②. 安心・安全部会の見守りへの説明

子供たちの登下校に関わっている見守りボランティアへ、説明会が行われた。見守りボランティアは、長く活動している人が多く、熱い思いをもって活動している【図表7・8】。

【図表7 安心・安全部会 見守りボランティアのご意見の一部】

- ・子供たちと歩く時、ほめるように心がけています。
- ・「ありがとう」と言ってくれた一言がとっても嬉しかった。
- ・子供たちは、登下校の道中に「おじさん、昨日嫌なことがあった」や「弟が言うことを聞いてくれなくて本当に困る」など学校や家庭での悩みを、時に打ち明けてくれます。

【図表8 見守りボランティアへの説明】



見守りボランティアが、子供たちから聞いたことを保護者や関係機関につなぐことによって、いじめの早期発見等につながったこともあった。この説明会で、見守りボランティアは安心・安全を色々な面で支えているだけでなく悩みの相談もできる関係になってきたことを、学校関係者とともに理解することができた。

2.5. 地域との活動事例 4年生：「ふるさと富加の自然大発見」～地域の自然環境から学ぶ～

熟議による「願いの共有」で大切にしたいことを基に、全ての学年でふるさと学習が行われている。今回は、4年生の活動を紹介する。

オリエンテーションで「富加は自然が豊かな所」と多くの児童が答えたため、理由を聞いてみると「緑が多いから」、「いなか？だから」といった実感や根拠がないイメージによることが分かった。そこで、この学習を通じて、「自分の言葉で富加の自然の豊かさを話せる子にしたい」、さらに、「地域の一人としてふるさとの環境を守ろうとする意欲をもたせたい」という目標のもと、単元のテーマが『富加町の自然の豊かさを、多くの人にPRしよう！！』と設定された。

4年生の最初の活動に、漁協の人と一緒にいる鮎の放流がある

【図表9】津保川流域漁業協同組合富加支部の皆さんの協力を得て、子供たちは鮎の放流を行った。この活動の後、子供たちは、「放流した鮎たちが、流れに押されないようがんばって泳いでいました。ぼくは、心の中でがんばれと応援してあげました。」「こんなに近くで鮎をじっくり見たのは初めてでした。富加の川で鮎が元気に泳げるように、きれいな川を守っていきたくて思いました。」と、感想をもつことができた。

【図表9 鮎の放流】



水の透明さや鮎が元気に泳いでいく姿を見たり、地域のことを大切に思っている津保川漁協の人と関わったりすることで、子供たちは実感を伴う地域の魅力を体感することができた。担任は目指す子供の姿への手ごたえを感じたようだった。

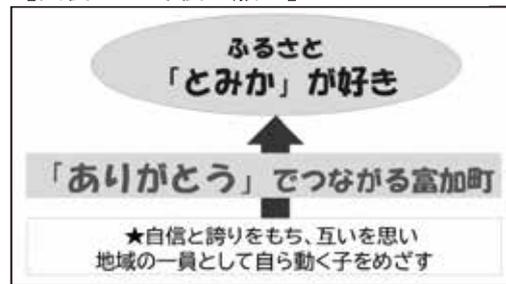
漁協の人の思いに触れた子供たちと、子供たちと一緒に活動した漁協の人たちとのお互いの気持ち伝わり、「ありがとうのつながりができた」と感じられた。

2.6. 今後さらに

地域学校協働活動推進員は、今後、学校と地域のつながりをさらに広げて深めていきたいと考えている。特に、学校と家庭と地域がつながることによって、子供の居場所・保護者の居場所・地域の色々な人々の居場所・それぞれの居場所がある町づくりを進めていきたいと考えている。そのために、地域の課題を把握し、多様な家庭と関わる地域支援の部会もつくる必要があると考えている。

地域もありがとう、家庭もありがとう、学校もありがとう、「ありがとう♡ありがとう」の合言葉でつながる、「ふるさと『とみか』が好き」な子が育つ、あたたかい町づくりを進められていくことが期待される【図表 10】。

【図表 10 今後の願い】



3. 七宗町の実践

3.1. 七宗町の紹介

七宗町は、上麻生地区、神淵地区の2地区に分かれており、各地区に小学校1校、中学校1校がある。七宗町は学校と地域とのつながりがもともと強く、地域と連携した学習が行われている。学校は、伝統の篠笛や太鼓【図表 11】、グラウンドの草取り、登下校の見守りなど多くのことで協力を得ている。そのような中、令和4年度にCS導入を目指すことになった。

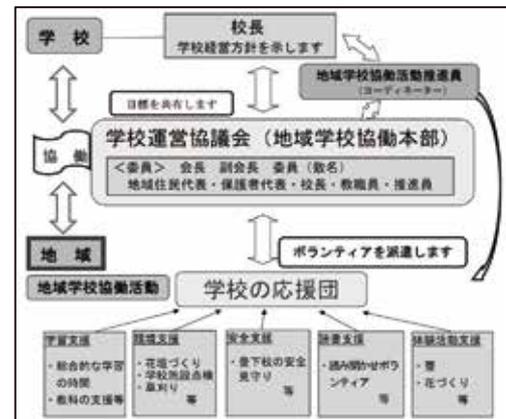
【図表 11 太鼓の練習】



3.2. CS 導入に向けて

CS 導入は、各市町村の状況や導入している市町村の動向及び導入までの流れ等を聞くことから始められた。色々な導入の仕方がある中で、七宗町ならではのスタイルとしてはどんなものがよいかを考えられた。最終的に、今までの地域との連携の在り方を大切にするために、学校評議員がそのまま学校運営協議会委員になり、地域学校協働本部員にもなってもらうことになった。また、学校運営協議会は、上麻生地区と神淵地区に1小1中合同で開催できるように構成された。

【図表 12 七宗町 CS の組織】



学校と地域が連携する上で一番の要になる地域学校協働活動推進員は、地域とのつながりが深いコミュニティセンター長兼社会教育委員に依頼された【図表 12】。

3.3. ぎふ地域学校協働活動センター支援プログラムの活用

七宗町はCS導入にあたり、「ぎふ地域学校協働活動センター」の短期および長期支援プログラムを活用し、CSと地域学校協働活動について理解を深めた。令和3年度に実施した短期支援プログラムでは、ぎふ地域学校協働活動センター長を講師として、教育長、校長、教頭等の学校の教員及び地域学校協働推進員の2人と、教育委員会事務局の職員を対象にリモートで講演会を行った。令和4年度から安心してCSや地域学校協働活動を実施していくために、学校側の悩みや行政側の動きなどを検討して共有することができた。

【図表 13 青山氏による講話・学校運営協議会】



令和4年度は長期支援プログラムにより、4月から始まるCSの相談体制を整えた。4月26日第1回学校運営協議会では、岐阜小学校学校運営協議会長の青山朋宏氏に講演を依頼され、制度の説明や最先端の取組が紹介された【図表 13】。その後、上麻生地区と神淵地区に分かれて学校運営協議会を行い、いよいよCSがスタートすることになった。

3.4. カリキュラム（ふるさと学習）の見直し

CSが始まることに伴い、【図表14】のように両学校のカリキュラムの見直しが行われた。

上麻生小学校は、特別活動のカリキュラムの見直しにより、「なかよしピクニック」を地域とともに計画から練り直すことになった。

神淵小学校では、CS導入の前年度に、地域の人（地域学校協働活動推進員と地域のつながりに詳しい人）を招いて総合的な学習の時間の見直しが図られた。今まで行っていた学習をさらに七宗の魅力を感じることができるようするために単元指導計画を見直し、地域講師の発掘も検討された。

さらに令和4年の夏には、職員が七宗町の魅力を知る必要があると学校が考え、研修が行われた。この時は地域学校協働活動推進員が講師を務め、「七宗かるた」を使って七宗町を巡る研修が行われた【図表15】。

3.5. 学校運営協議会で願いの共有

上麻生地区では、地域と学校が同じ思いで子供たちを育てていきたいという願いから、合言葉が考えられた【図表16】。「あい」という言葉には、「こんな子供たちを育てたい」という4つの願いと、「だから大人がこうしていこう」という4つの決意が込められている。

上麻生地区で育てたい子供は、「挨拶ができる子」、「助け合える子」、「自分らしさを発揮できる子」、「地元を愛する子」、この4つが学校運営協議会で話し合われた。そのために大人が大切にしたいことは、「大人が、挨拶を大切にする」、「大人が、助け合って活動する」、「大人が、一人一人をよく見て、よさを伸ばす」、「大人が、子供たちとたくさん関わる」の4つが考えられた。この4つの決意が込められた「あい」を地域と学校が共有し、同じ考えで子供たちを育てていくことになった。今まで関わりのあった読み聞かせサークルやお茶摘み体験でお世話になる地域の人とも共有し、『『あい』で育てる上麻生っ子』の取組が始まった。「大人が」を主語にして大切にしたいことが示されたことは、地域の方の当事者意識の高まりにつながってくると考えられる。今後、「あい」に込められた活動が展開されることが期待される。

3.6. 地域センター室の設置

神淵地区では、神淵小学校内に、地域の方が打ち合わせをしたり地域学校協働活動に使ったりする地域センター室が用意された【図表17】。学校が、地域の方に学校のことをもっと身近に感じてほしい、いつでも学校に集ってほしいという思いからだった。推進員からは、「この部屋を利用することで、お互いが遠慮せずに関わり合えるようにしていきたい。地域の人に、学校のことを考えてもらえばいい。少しでも、学校の存在が身近になれば・・・」という話があった。今後は地域の方との交流の場としても幅広く活用していければと考えられている。

3.7. 上麻生小学校 全校行事：なかよしピクニック

毎年11月に「なかよしピクニック」という校区を回るオリエンテーリングが行われている【図表18】。今まで学校のみで実施していたこの行事を、学校と学校運営協議会で一緒に取り組むこ

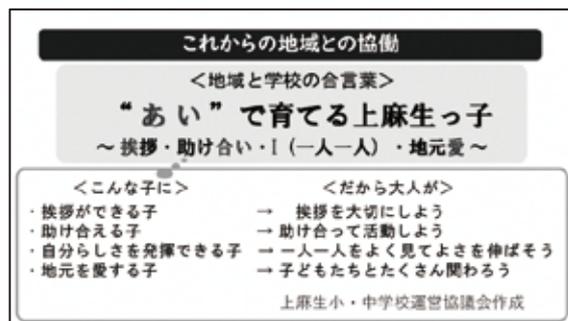
【図表14 ふるさと学習見直しのポイント】

- ・今までもやってきた総合的な学習の時間や特別活動の内容を見直す。
- ・子供たちが、今まで以上に七宗の魅力を感じ、ふるさと七宗のために自分で考える子を育てるには、どうしたらよいか。
- ・地域の方と一緒にできる学習は何か。

【図表15 地域を学ぶ職員研修】



【図表16 上麻生地区 願いの共有】



【図表17 地域センター室の設置】



とになった。学校運営協議会の委員は企画から参加し、準備や当日の運営は、商工会や地域のボランティアなどさらに多くの地域住民に協力してもらうことになった。準備の段階で学校が困ることがあっても、「それはあそこのあの人が得意だから聞いてみるわ。」と、委員の人脈を生かした素早い対応で、あっという間に問題は解決することができた。

実際に行ってみたところ、地域から多くの応援協力を得られたため、学校職員の動きに余裕が生まれ、子供たちの様子をよく見ることができるようになった。また、地域の人には、自分も子供たちの成長に一役買っているという実感を持っていただけたようである【図表 19】。

【図表 18 なかよしピクニック】



【図表 19 なかよしピクニック参加者の声】

<p><児童の声></p> <ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの人に挨拶をすることができた。 ・人が増えて嬉しい。地域との一体感があった。 ・にぎやかで楽しかった。 	<p><地域ボランティアの声></p> <ul style="list-style-type: none"> ・回覧板で知り、子供たちのために参加した。元気な姿を見ることができて嬉しかった。
<p><保護者の声></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供たちの行事を地域の人と一緒にできることは大変ありがたい。子供たちの行事も盛り上がり、たくさんの人々の目があるという点で安心感もあった。 	<p><商工会からの参加者の声></p> <ul style="list-style-type: none"> ・CSになったことで、地域と学校が近くなり、関わりが強くなった。 ・子供たちのため活動することで、保護者や地域の人に商工会の存在を知ってもらえる。 ・商工会として地域づくりに貢献したい。
<p><学校職員の声></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の人がたくさん来てくださり、安心感につながった。地域のスペシャリストからは、七宗ならではのことを学ぶことができた。 	

3.8. 神淵小学校 6年生：総合的な学習の時間「大好き七宗」

神淵小学校では、6年生の総合的な学習の時間に、「大好き七宗」という単元で七宗の自然環境と生活との関わりを学び、ふるさと七宗のために自分ができることを考えるという学習を行っている。

令和3年度にこの学習が見直され、令和4年度から鮎の友釣りの学習が加わった。学校と地域が一緒になってこの単元を見直し、単発的に行う学習ではなく、1年間を通して学習できる内容となるよう計画された。1回目が稚魚の放流、2回目がナスを鮎に見立てた友釣りの練習、そして3回目に実際に川に行き鮎の友釣り体験をした【図表 20】。今後は第4回目に産卵の場面を映像で鑑賞し、鮎を料理して食べるという年間プログラムが組まれている。推進員が声をかけ、多くの地域の講師が集まり行われている。

【図表 20 鮎の友釣り体験】



【図表 21 地域学校協働活動推進員の話】

最近子供が少なくなったため、子供たちと携わることは地域の喜びになっている。ふるさと学習を通して、学校との敷居を低くし、気楽に学校に来ることができるようしていきたい。また、年間を通したふるさと学習を教科指導とリンクさせながら、カリキュラム開発にも関わっていきたい。

3.9. まとめ

七宗町は、今後、地域にCSの意味を正しく理解してもらい、地域と行う全ての活動を地域学校協働活動と位置付けていきたいと考えている。学校運営協議会で活動を見直しながら、学校と家庭・地域との連携・協働の在り方をさらに充実させていく取組が期待される。

4. 八百津町の実践

4.1. 八百津町の紹介

八百津町は、杉原千畝の生誕地として「人道のまち やおつ」というキャッチフレーズや、伝統のある「八百津まつり」「久田見まつり」があり、自然と文化と伝統のある町である。

八百津町には6つの地域があり、5つの小学校と2つの中学校が存在している。地域の人口推移を見てみると、すでに10年前から始まっていた少子化の状況は、今後、益々顕著になることが予想され、少なくなる子供たちが、地域を担っていく時代が迫っている。

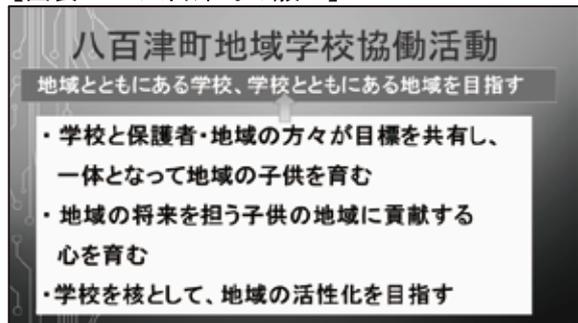
4.2. CS 導入に向けて「地域とともにある学校、学校とともにある地域」を考える

令和元年に、これまであった「学校評議員会」から「学校運営協議会」への移行を進めることとなった。また、同時に「地域学校協働本部」を立ち上げることとなった。新たな組織をどのように立ち上げるか、学校が主体となっていた活動を、地域の活性化のためにどのように進めるかということが最初の課題になった。

まずは、地域学校協働活動のテーマが、「**地域とともにある学校、学校とともにある地域を目指す**」

と設定された。ここに込められた願いは、これまでの「学校のために地域の協力を得る」ことから、「地域の思いを学校と共有する」「学校が地域を支える」という双方向的な関わり合いを重視していくということである。このテーマにそって、次のようなこと【図表 22】が明確にされた。「学校・保護者・地域が目標を共有する」「地域の未来、子供の将来のため貢献する心を育む」「学校を核とした地域の活性化を目指す」の3つが柱とされた。子供たちが、地域を愛し、地域に貢献できる体制をつくることは、最重要課題であると考えられた。

【図表 22 八百津町の願い】



4.3. ①. 学校運営協議会と地域学校協働本部

組織を作る際、「地域学校協働本部」を町で一つにして「学校運営協議会」をそれぞれの学校に立ち上げる案と、「地域学校協働本部」をそれぞれの学校に置き「学校運営協議会」と同時に開催する案が浮上した。八百津町の実態として、学校が広範囲に存在すること、地域によって文化や実態の違いがあること、学校や地域のニーズに違いがあることなどを考え、それぞれの学校に「地域学校協働本部」と「学校運営協議会」を置いて同時開催をすることとなった。

4.3. ②. 委員選出

委員の選出については、組織を立ち上げるに当たり誰を選出したらよいのか大きな課題となった。これまで、学校教育に関わっていた人、教育に理解のある人、協力的である人、地域を代表する人など、地域の中から探す必要があった。

校長、公民館長、推進員、社会教育委員などと相談することから始まり、候補者への説明、承諾という過程の中で決定してきた。会長が決定すると、民生委員、教育関係者、地域関係者の中から委員を選出する運びとなった【図表 23】。

【図表 23 学校運営協議会委員の選出について】

委員の選出：子供に関わる方＋地域づくりに関わりのある方で構成する
(例) 社会教育委員、公民館長、民生児童委員、学識経験者、各ボランティア代表（見守り、読み聞かせ・・・）、地域のまちづくり委員、校区学校・園関係者、人権擁護委員、保護者代表（PTA 役員）等

4.3. ③. 会議の持ち方

CS がスタートした当初は授業参観が中心だったため、子供たちの様子の意見を聞くことに時間が費やされ、地域学校協働活動のための熟議の時間が取れないことが通常だった。そこで、会議の前半を「学校運営協議会」とし、学校経営方針説明・承認、学校の教育活動の説明・意見交流、学校から地域の協力を得たいことなど、より深い話し合いの時間とした。会議の後半を「地域学校協働本部」とし、これまで行われてきた地域行事への学校

【図表 24 会議の持ち方】

会議の進め方：学校運営協議会と地域学校協働本部をきっちり分ける
・学校運営協議会・・・学校の経営方針の承認、教育活動への意見（合議体）
・地域学校協働本部・・・学校を核とした地域づくり
※学校の応援から、地域の活性化へつなげる

の協力、新たな活動への提案などの意見交流を行うこととした【図表 24】。

また、第 1 回学校運営協議会のはじめに、地域学校協働活動推進員から委員に対して本組織の必要性や本活動の目的など説明の時間を設けられた。CS を正しく理解することで、「熟議」を大切に地域での思いや学校の願いを互いに理解することに時間がかけられた。

4.3. ④. 本部の組織

CS スタートの段階では、学校のニーズを地域の方に知ってもらう、そして、ニーズに合わせた活動を計画して地域の協力者を得ることから始まった。学校のニーズに合わせて、学習支援・環境支援・体験活動支援・安全支援・読書活動支援などの部会を組織し、地域のより多くの協力者を得る体制をつくることを目指した。この時、地域住民から協力者の一般募集（登録制）も検討されたが、学校のニーズに沿わない活動、地域のニーズに合わない活動に対応できないことも想定されたため、本部の委員から輪を広げる方法をとることになった。

最終的に、7つの学校に「本部」を設置し、助言者として2名の推進員を配置した。さらに、社会教育委員7名が各本部に委員として所属することになった。7名の社会教育委員には、各本部への助言とともに7つの本部の活動の交流をしてもらい、町全体の集約につなげようと考えた。

スタート時は、学校のニーズから地域の応援を得たり人の輪を広げたりすることを目的としていたが、今後、学校づくりから地域づくりへ移行しながら町全体としての活動につなげていくことが考えられている。

4.3. ⑤. 具体的な活動に向けて

これまでの学校運営協議会の中で、地域から多く聞かれた意見として「何をしたらいいか、何をしてほしいかなど具体的に教えてほしい」というものがあった。活動の意図が理解できても、具体的な活動がイメージできないと動けないということだった。

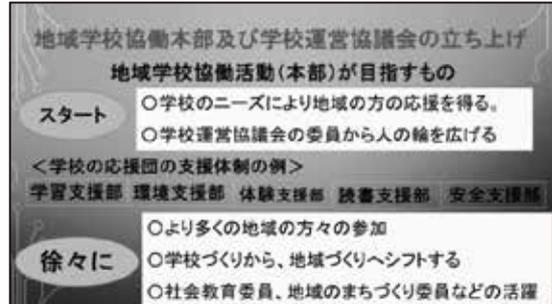
そこで、どのような活動が求められているのかが分かるように、学校ごとに組織の在り方を【図表 27】のように作成した。学校の願い、地域の願いが込められている。

最初は、まず、1つの学校でイメージした組織図を作成し、その他の6校はそれぞれの願いに合わせて、活動内容（どのような支援部が必要か）を明確にした組織図を作成した【図表 27】。

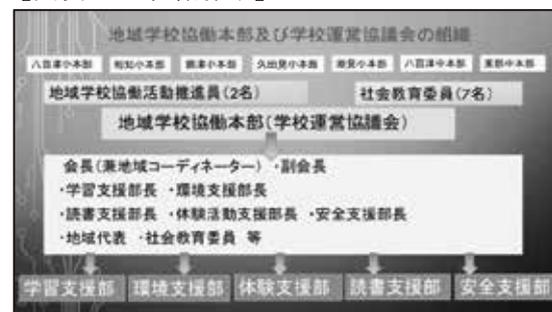
4.4. 学校運営協議会計画と実際の活動について

全ての学校は【図表 28】のような学校運営協議会計画を作成し、年間の見通しを立てている。具体的一例として潮見小学校の実践を紹介する。

【図表 25 地域学校協働活動が目指すもの】



【図表 26 組織作り】



【図表 27 潮見小学校 地域学校協働活動 5つの部会の例】



【図表 29 潮見小学校 ふるさと学習 見行山登山】



学校運営協議会計画書に位置付くふるさと学習の一環として、八百津町で一番高い山である見行山に全校で登った【図表 29】。保護者や地域の方も一緒に参加し、潮南の豊かな自然をみんなで感じることに繋がった。地域の方の発案で、全校児童の似顔絵入りの標柱を作っていたいただき、山頂に立て、潮見小学校最後のふるさと体験学習でたくさんの思い出を作ることができた。その他、環境整備、花壇づくり、野菜作り、潮南の魅力を知る学習、スポーツ体験など、色々な面で地域学校協働活動が行われている。

4.5. これまでの成果と課題

この活動を始めて4年目となるが、今後を考えると、少子化の問題、地域の伝統を守る手段など、課題は多くある【図表 30】。現在も学校の統廃合の議論もなされており、学校の在り方が大きく変わろうとする時が近づいているため、7本部でスタートした組織も今後再検討する必要がある。地域の未来、子供たちの将来のために、より充実した「地域学校協働活動」が推進されることが望まれる。

【図表 30 成果と課題】

○これまで取り組まれてきた学校の地域人材がより組織的に機能した。	△新型コロナにより、活動を予定どおり進めることが困難な状況にあった。
○児童生徒が地域の方と触れ合う機会が多くなった。	△地域行事と子供の関わりを深める取組がさらに期待される。
○学校と地域の関わりが深くなり、地域の協力が多く得られた。	△地域の方が、より多く参加できるようにするための手立てが必要になる。
○児童生徒が地域と関わる中で、理解を深め、貢献する姿勢が高まった。	△地域コーディネーターとして、長く関われる人材が期待される。
	△推進員とともに、企画運営に地域が主体となれる体制が望まれる。

【図表 28 潮見小学校 学校運営協議会計画】

学年等	教科等	教育活動のねらい	活動内容	地域人材	時 数
全校	F	校内環境整備	単学期(5月9日・11日)	環境支援G	3時間×3回
		校内環境整備	単学期(12月)	環境支援G	2時間
		花壇づくり	延ばき準備5月 種まき5月 花壇づくり6月 花壇完成6月	環境支援G	2時間 1時間 1時間
		花壇整備	単学期(7月9日×2) 水やり	環境支援G	1時間×3回 30分×適宜
		グランド整備	単学期6月～9月	環境支援G	2時間×3回
全校	読書活動 行事	読書への関心を高める 本に親しむ	読書講座 読書会 全校もくもく	読書支援G 図書サークル もくもくさん	15分×8回 1時間
全校	登校時 下校時		登下校の見守り	安全支援G (お母さんボランティアの方々)	適時
全校	F	スポーツへの興味関心を高める	サッカー 陸上 体操	体育活動支援G	1時間×3
自由参加	総合 木工など	潮南の豊かな自然を感じる	山登り(見行山) 木工作品づくり 自然を愛して遊ぶ	体育活動支援G	読書 木工×2 山登り×2
全校	F	潮南の豊かな自然を感じる	わらじ作り	体育活動支援G	2時間
自由参加	園芸	潮南の豊かな自然を感じる	里の観察	学芸活動支援	2時間
全校	F	野菜を育てる	野菜づくり	体育活動支援G	1時間×3
中学年	総合	へばについて学ぶ	へばについて調べ へばを育てる人に 聞くよとめ、発表	学芸活動支援G	1時間×3 2時間 3時間

5. 美濃加茂市の CS 導入について

美濃加茂市では、「社会に開かれた教育課程」を通して子供を育てていくために、この理念を地域や保護者にも広げていく必要があると考えられ、令和3年度からCS導入が始まった。まず加茂野小学校と山之上小学校に先行導入し、令和4年度前期には9つの全ての小学校、後期に3つ全ての中学校に導入されることとなった。教育委員会の担当者が、全ての学校に伴走型支援を行い、計画的に進められている。

5.1. 全ての学校へCSの説明を実施

ぎふ地域学校協働活動センターの支援プログラムを活用し、美濃加茂市内12校の全ての学校の職員や保護者、地域関係者にCSの説明を行ってきた。関わる全ての方が正しく理解することで、各学校の熟議も効果的に行われている。

5.2. 「CS、地域学校協働活動の進め方」導入のための資料

【図表 31 「CS」説明資料】



CS 導入に向けて保護者や地域の理解を促進するために、CS のよさや設置に向けたステップ、組織のイメージなどを説明したチラシを児童・生徒・保護者へ全戸配布し、地域回覧を行った【図表 31】。また、学校への説明として、校長会で担当者から、【図表 32】にあるような具体的な学校運営協議会の在り方が説明されている。

5.3. CS の経過報告（年 2 回、全戸配布と地域回覧）

CS が導入され、年に 2 回、教育委員会からチラシ（CS 理解促進のため）【図表 33】が発行されている。9 月に発行されたチラシには、小学校で行われている様々な活動の様子が紹介されている。また裏面には、学校運営協議会の熟議での意見が紹介されている。（一部抜粋～学校運営協議会はネットワークの広がり、フットワークの良さがポイントですね。～）このチラシによって、地域へ CS の理解を促したり地域学校協働活動に関わる仲間を増やしたりすることが期待されている。

5.4. 美濃加茂市富加町中学校組合立双葉中学校の実践（3 者の熟議）

双葉中学校は、令和 4 度後期から CS を導入した。まず、学校職員の研修で「双葉中学校の生徒がどんな人になってほしい？どんな力を付けてほしい？」という内容の熟議を行い、つぎに、生徒には「楽しい学校って、どんな学校？」という内容で熟議を行った【図表 34】。

また、第 1 回学校運営協議会で熟議を行った時には、「もっと子供たちの個性を認めていくことが大切ではないか。同時に保護者が地域を理解し、つながるようなことも重要だ。」という意見も出てきた。この学校運営協議会では、学校職員と生徒の 2 つの熟議の内容についても報告されたが、3 者の願いには共通する部分も多いが、互

【図表 32 組織的・機能的で継続的な学校運営協議会にするために】

- ① 少ない人数から始めるのもよい
- ② これまでやってきたことを土台にして
- ③ ビジョンを一人で創らない 複数の人が関わって
- ④ リアルな子供の姿をとらえて 子供の活動重視で
- ⑤ 目標を共有し合って 熟議をしよう
- ⑥ 運営協議会は一人一人が主体的に
- ⑦ 学校長はヘッドワーク・フットワーク・チームワークで マネジメント力が大事（教頭任せでは進まない）
- ⑧ 前任者が CS や地域学校協働活動の理念を共有できる人を推薦する仕組み（人は変わっても、理念や願いは継続する）
- ⑨ 地域の課題解決、次世代の地域の担い手を育成する目標があるか
- ⑩ 「社会に開かれた教育課程」の具体的な実践を
- ⑪ 理解者を広げるには、子供の姿で示していく
- ⑫ やりっぱなしにしない。常に子供の成長した姿で評価していく。「〇〇の活動で、子供たちに◇◇の力が育ってきたね」
- ⑬ 情報を常に発信し、理解者を広げる努力を（運営協議会は地域・保護者に広げる、校長は職員に広げる）

【図表 33 みんなで熟議をしませんか！】



【図表 34 熟議の様子】



いの立場の違いがあるからこそ出てくる意見もあることが分かった。双葉中学校では、一番の中心にいる生徒の思いを学校と地域が受け止め、その上でどのように「地域とともにある学校」を目指すのか、地域は何ができるのか、の模索が始まろうとしている。さらに、校長は、これらの熟議の内容を次年度の学校経営の参考にしていきたい、とも語っている。

6. 可児市立旭小学校の実践

可児市立旭小学校は令和3年度から準備を始め、令和4年5月にCSを導入した。旭小学校の教育活動は、多くのボランティア活動により支えられている。「トイレ掃除ボランティア（保護者・地域）」「読み聞かせボランティア」「給食エプロン補修ボランティア」「交通安全登下校の見守りボランティア」など、多くの地域との関わりの中で教育活動が進められてきた。

6.1 準備委員会でCSの説明

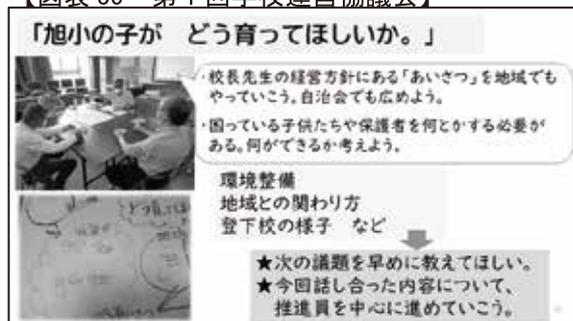
CS導入に向けて、2回目の学校評議員会を学校運営協議会準備委員会として準備を進めてきた。まず、可茂教育事務所からCSの説明を行い、校長は「地域とともにある学校」を目指す熱い思いを語られた。CSの在り方を正しく理解した学校評議員からは、CSの必要性を理解されたからこそ、誰が委員になるべきか、課題はないか、といった率直な意見を交流し合う貴重な時間となった。

また、学校内でも職員研修が行われ、理解が深められてきた。

6.2. ①. 第1回学校運営協議会による熟議

第1回学校運営協議会で、教育事務所から再度CSについて説明し、熟議を行った。熟議のやり方やルールを簡単に説明し、安心して参加できるようにした。テーマは「旭小の子がどう育ってほしいか」。最初は何を話せばよいのか少し戸惑うところもあったようだが、校長や教頭のファシリテーターの力もあって、今まで学校評議員会に参加されていない方も自分の立場でテーマについて話されるようになった。自分の考えを話せば話すほど、「自分だったらこんなことができる」と、当事者意識も芽生えてくることが分かってきた【図表35】。

【図表35 第1回学校運営協議会】

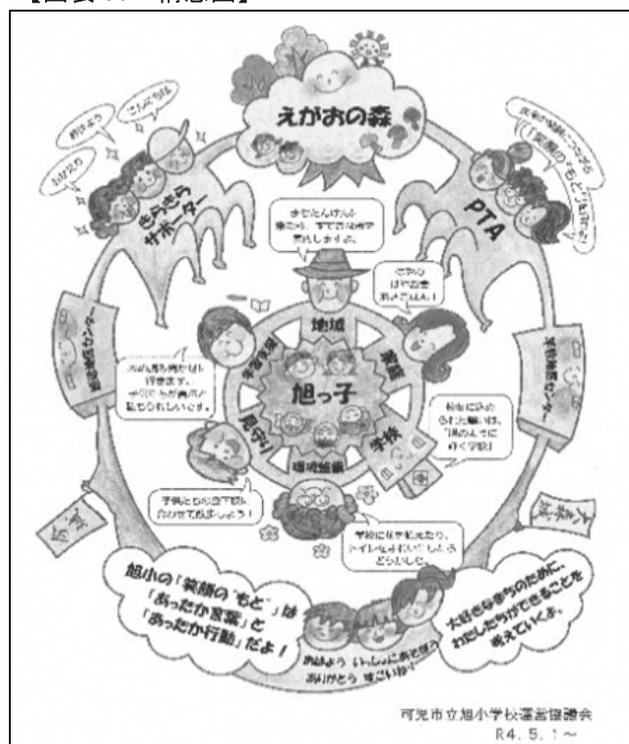


学校運営協議会の終わりに差し掛かったころには、「こんなに大切な会なんだから、早めに次の協議会のテーマを教えてください。地域の様子を把握したり意見を考えたりしてきたいから。」とのご意見をいただくほどだった。

6.2. ②. 第2回学校運営協議会による熟議

第2回学校運営協議会では、事前にテーマを委員に伝えてから行われた。テーマは「旭小のために地域ができること」。同時にCSの構想図を作成するため、そこに入りたいメッセージも考えていただくことが依頼された。第1回の会は校長や教頭のリードで進められたが、第2回の会は学校運営協議会長と地域学校協働活動推進員の二人が、ファシリテーターとして大活躍した。協議会の内容が事前に知らされていたことと、当事者として進むべき方向を理解されていたからだと考えられる。この協議会で決まったCSの構想図は【図表36】のようになった。

【図表36 構想図】



6.3 学校運営協議会をPTAが取材

子供たちを育てる一番の当事者である保護者が、CSについてもっと理解する必要があると考え、

PTA 役員が学校運営協議会を取材し PTA 広報で紹介することが計画された。学校運営協議会で協議していることは、「どんな子供たちを育てたいか」、「そのために学校、地域や家庭で何ができるか」である。今後子供たちのために CS を推進するには、保護者からの意見が大切になることを伝える必要があるからである。その記事の中には、「保護者の皆さんからのレスポンスが必要です。学校運営協議会で話し合っしてほしい議題を受け付けます！」というコメントがあった。学校・地域・家庭がともに連携・協働した取組が始まろうとしている。

6.4 地域や子供たちへ発信

令和 4 年度に旭小学校で行われることになった可児市笑顔の学校公表会（可児市の各小中学校で行われている研究会）を機に、学校が大切にしている「笑顔の“もと”」について、地域の人が語る VTR を学校が作成し、子供たちや職員に見てもらった。すると、

- ・地域の人や家族のおかげで、みんなが笑顔になっている。
- ・地域の人に支えてもらっていることをはじめて知った。
- ・旭小学校は素敵な学校。すごい学校だと思った。

という感想が児童や職員から集まってきた。地域との連携や旭小学校のすばらしさは誰もが知っていると思われていたが、VTR を見たことで、地域や家庭との連携の大切さに気付いたり再認識できたりする貴重な発見があった。CS になった効果を、子供や職員が実感しながら今後の活動が進められることは、大変意味のあることだと考えられる【図表 37】。

6.5 CS を導入した効果

CS を導入したことで「地域と学校の距離が近くなった」、そんな効果を学校は感じているという。地域の団体から「学校のためにできることはないか」という声がかかったり、市役所から「地区センターの講座で小学生に講師をしてほしい。」という依頼があったりした。講師を務めた子供は、行政担当者のサポートを受けながら、企画から運営まで任された【図表 38】。子どもたちが地域の中で活躍できたことを実感し、そのことにより大きな自信に繋がった、と校長は語っていた。また、職員の地域の人や物への意識も変わり、地域講師が積極的に関わるふるさと学習が増えた。今後、学校と地域との結びつきが一層強くなることが期待される。

【図表 37 地域紹介 VTR 撮影
想いを語る学校運営協議会長】



【図表 38 「タブレット基礎
講座」で講師を務める児童】



7 おわりに

可茂地区の 10 市町村では、地域ならではの自然・文化・歴史や人材等を活用して、地域で学ぶ、地域を学ぶことで、魅力ある地域づくりや未来に向けた人づくりで成果をあげている。特に今回報告した 2 市 3 町では、地域学校協働活動に関わる人が「ぎふ地域学校協働活動センター」が行っている地域学校協働活動推進員等育成研修に参加することで、地域学校協働活動に対して理解を深めながら地域の強みを生かした実践が展開されている。

今後、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組や、地域とともにある学校づくり・学校（子供）を核とした地域づくりが益々求められるため、学校教育と社会教育の連携を深め、CS と地域学校協働活動の一体的推進が必要になってくる。そのためにも、学校（特に管理職）や地域や保護者（PTA も含む）が CS や地域学校協働活動について正しく理解することが重要となってくる。可茂教育事務所として各市町村教育委員会（学校）への説明を行い、可茂県事務所として様々な取組や地域学校協働活動を交流できる研修会を充実させ、伴走型支援を行っていきたい。

注

1) 以下の報告内容及び掲載の図表は、令和 4 年度可茂地区社会教育振興協議会研修会の発表における報告資料に基づいて記述されている。